

英語教員養成における絵本活用の可能性をさぐる

糸井 江美

Exploring Possibilities of Using Picture Books for Pre-service English Teachers

Emi Itoi

This article first presents a brief review of three practical studies where picture books were used to enhance college students' motivation to read, emotional intelligence, and knowledge about educational psychology. Second, it reports the results of the author's practical study that explores possibilities of using picture books for pre-service English teachers. The results show that picture books can be great teaching materials at college level to teach not only English but also their contents such as education and gender issues if they are carefully selected.

1. はじめに

一般的に絵本は子どもを対象としていると捉えられがちだが、経験を積んだ大人だからこそ楽しめる絵本が多く存在している（岡田，2011；落合，2006；Ho, 2000）。絵本は楽しむ対象という存在に留まらず、絵本を読み聞かせる世代間交流型のボランティアに参加することが認知症の予防になるという研究結果も報告されている（鄭・鈴木・村山・長沼・野中・大場・倉岡・藤原，2012）。さらに絵本を読むことがセラピーになるとして絵本セラピストの養成講座を開催する絵本セラピスト

協会¹という団体も存在するなど、大人と絵本の関わり方も多様になってきている。

教育の現場でも幼児や小学生だけでなく、大学生を対象に絵本を教材とした実践報告も散見するようになり、そこでは単に読解力を伸ばす目的ではなく、読むことに対するモチベーションを高めたり、感情的知性 (Goleman, 1995) を豊かにしたりなど絵本の心理的な側面への働きかけが重視されている (e.g., Hayashi, 2012, 2015; 藤岡, 2007; Fujioka, 2004; Zambo, 2005; Zambo & Hansen, 2005)。

以上のような背景から、筆者が担当する授業でも絵本の新たな活用方法を模索することにした。将来的には、学期を通して絵本を中心とした授業を展開することを目標とし、今回は、後述するZambo (2005) が行った例に倣い、教育問題をテーマにした絵本を用いた授業を学期の最初に導入した。本稿では、まず絵本を使った大学授業の先行実践研究を3例紹介し、次に筆者の授業実践を報告する。

2. 教材としての英語絵本

教材として扱える英語絵本は大きく3つに分類することができる。ひとつ目のグループは日本の幼児や児童を対象にした英語学習の為の英語絵本である。それらの絵本の特徴は、英語を外国語として学ぶ子どもたちに適したレベルや内容になっており、多くの場合教室用大型サイズの絵本、読み聞かせ用のCD、教師が使う指導書も入手することが可能である。

次のグループに属するのは、多読用のグレイディッド・リーダーズと呼ばれるものである。グレイディッド・リーダーズでは、使用する単語

¹ 絵本セラピスト協会 <http://www.ehon-therapy.jp/>

や文法が細かく分けられたレベルごとに制限されているため、読者は自分のレベルにあった絵本を選ぶことができる。多読を前提としているため安価であり、薄く小型のペーパーバックは持ち歩くにも便利である。個人が一冊ずつ購入することも可能であるが、図書館や学校などの施設が大量に揃えて学習者に貸し出す形式が一般的である。

最後のグループに属するのが、特に外国語学習を意識したものではない一般的な洋書の絵本である。乳幼児を対象とした絵本から大人が楽しめる内容の絵本まで千差万別である。また絵本ならではのイラストレーションの芸術的評価が高いものも多い。

日本の大学生を対象とした英語教育において、教材として考えられるのは前述の多読用のグレイディッド・リーダーズと一般的な洋書絵本である。本論で紹介する筆者の実践では、教員になる学生が絵本を通じて教育に関する問題を考えることと絵本の教材としての可能性に触れることを主な目的としていたため、一般的な洋書を使用した。授業でどの絵本を使用するかを決定するまでに、考慮しなくてはならない点がいくつかある。次の章では選書と絵本の入手方法をまとめる。

3. 選書と入手方法

絵本を教材として使用する場合、最も重要なことの一つは学習者の目的やレベルに適した絵本を探し、入手することである。絵本探しには海外で出版されているガイドブックが役立つ。例えば、“The New York Times Parent’s Guide to the Best Books for Children” (Lipson, 2000) では 米国で出版された絵本を含む児童書1001冊が紹介されている。索引が豊富で、書名、著者名、イラストレーター名、対象年齢、読み聞かせ用、トピックなどから目的の絵本や児童書を簡単に探せる工夫がなされている。同じく米国で出版された “Worth a thousand words”

(Ammon & Sherman, 1996) もガイドブックとして大変優れている。このガイドブックが紹介するために選んだ本の基準は、芸術的・文学的質の高いもの、幅広い年齢層に支持される普遍的な価値観がテーマになっているもの、多様な形態の学びにつながる重要な問題を扱ったものである。またイラストを使った索引を使うなど絵本探しが楽しくなる工夫がされている。

欲しい絵本が決まれば次にどこから入手するかを考える必要がある。洋書を扱っている書店の店頭で注文することもできるが、最近ではインターネットのお陰で簡単に絵本の情報を知り、購入することができるようになった。例えば、[www. goodreads.com](http://www.goodreads.com)の“Picture Books for Adults”のページには家族や人生などがテーマの、癒されたり心を揺さぶられたりする絵本が100冊以上、書評とともに紹介されており、購入することも可能である。古本を安く入手するには[www. betterworldbooks.com](http://www.betterworldbooks.com)がお勧めである。このBetter World Books社は世界の非識字者の識字能力を高めることをミッションとしており、1冊の本が売れると本を必要としている施設などに1冊の寄付をおこなっている。

絵本を使う授業は、以上のように教育目的に合い、生徒・学生のニーズ、レベルに合った絵本探しから準備が始まることになる。時間が掛かる作業ではあるが、宝物のような絵本に出会える貴重な時間であると言える。

4. 先行研究

この章では大学の英語の授業で絵本を使った2例と教育心理学の授業で絵本を使った先行実践研究を紹介する。

4.1 英語リーディング教材としての英語絵本

英語が不得意な学生を対象に絵本を教材として使用したHayashi (2015) が挙げる絵本の利点は次の4点である：1) 絵の存在によって内容理解が容易い、2) 一般的に短く簡単な文章で構成されており、内容理解が容易く文法や構文を学べる、3) 同じ語彙が繰り返し登場することが多いために語彙習得に効果がある、4) 多くの絵本が人生、家族、友情など普遍的なテーマを取り扱っているため学生が身近な問題として捉えることができ、クラスメイトとも感想などを分かち合うことができる (p.50)。つまり、絵本は英語に苦手意識を持つ学生にとっては内容が理解しやすいという利点があり、選書を間違わなければ、学生に深い感動をもたらす、子どもっぽさとは無縁の教材になる。

Hayashi (2015) の研究では、1年間絵本を読み続けることによって、学生（音楽専攻、31名の大学1年生）のリーディングに対する内発的動機は高まり、3分の2の学生に英語力の向上が見られた。また絵本を読むことに肯定的になり、興味も深まり英語を読むことに自信がついた。英語力の向上に絵本が貢献したのかどうかは、他の要因のコントロールが難しいため疑問の余地が残るが、絵本を使って英語を読むことに学生が積極的になれたということから、教材としての価値は確かめられたといえる。

4.2 感情的知性の向上を目的とした授業

藤岡 (2007) は昨今いじめなどが増え、若者の感情的知性が低下していることを懸念し、学生の感情的知性の向上を目的として、絵本の読み聞かせを授業に導入した。実践の対象となったのは関西の2つの大学に所属する63名（英文科所属が43名、社会学部所属が20名）であった。読み聞かせに使用したAllen Say (1993) の“Grandfather’s Journey”は、米国で最も権威ある児童書の賞のひとつ、コールデコット賞の金賞

(The Caldecott Award Gold medal) を受賞している。この絵本の中で、作者Allenの祖父は若いときに米国に渡り、米国内で旅を続ける。しかし、しだいに故郷の日本が恋しくなりやがては故郷に戻ってくる。ところが、日本に戻ると今度は米国が恋しくなるというように2国間で揺れ動く心情が描かれている。藤岡（2007）の授業では読み聞かせの活動以外に、学生が自分自身の祖父母についてのmind mapを作成する、絵本の中の登場人物に扮するロールプレイを行うなど多様な活動が行われ、その結果、学生の物語への感情移入が見られた。Hayashi（2015）の実践と同様に藤岡（2007）の実践でも学習者の発達段階に合った絵本が選ばれ、英語のインプットとアウトプットは学習者にとって意味のある文脈で行われている。このように「意味」「内容」「文脈」が重視される内容重視の教授法（Content-Based Language Teaching）（Briston, Snow, & Wesche, 1989）は今後日本の英語教育現場でも益々一般的になると予想され、その場合、ストーリーのある絵本が有望な教材のひとつとなるだろう。

4.3 教育心理学を学ぶ教材としての英語絵本

教員は子どもたちの認知的、社会的、感情的な成長や子どもたちが直面している問題を十分理解することが必要であり、教員養成を行う大学の授業ではそのために教育心理学や発達心理学などを教えている。しかし一般的に理論は大学の教師による講義という文脈のない状態で教えられることが多く、学生にとって身近な問題として捉えることが難しく、理論を理解することも容易ではない。そこでZambo（2005）は学生が教育心理の理論を絵本で学ぶことによって、理論を身近な問題と関連づけることができ、理解も深まると考えた。教材に使われた絵本“Thank You Mr. Falker”（Polacco, 1998）は難読症の少女にフォルカー先生が本を読む楽しさを教えるストーリーである。Zambo（2005）の報告に

よると、絵本を教材として使用することによって学生は、教育心理に関する理論を物語の文脈に位置づけることができ、視覚的にそれらの理論を捉えることが可能になった。結果的に理論に対する理解が深まったことによって、学生が卒業し教壇に立った時に、習った理論を思い出し、実際の教育の現場でその知識を生かすことができるとZambo (2005) は主張している (p.511)。

Zambo (2005) の実践では英語母語話者の学生に対して英語絵本を使用していたため、外国語習得とはまったく関係なかったが、以下に報告する筆者の授業では教育をテーマにした絵本を使用しながら外国語教育、英語教員養成という枠組みで授業を行った。

5. 実践報告

本章ではZambo (2005) の実践例を参考に筆者が試みた授業を報告する。筆者は、これまでリーディングの授業と児童英語教材研究の授業で英語絵本を使用してきた。英語絵本の教材としての可能性をさらに広げるために、今回は試験的にゼミの最初の授業に英語絵本を使用した活動を行った。

5.1 授業の目的と背景

今回の活動の主な教育的目的は以下の3つであった。まず、多様な子どもたちの存在を知り、教育問題の知識や教育理念を深めることであった。対象となった大学3年生15名(女性9名、男性6名)は英文科に所属する筆者のゼミ生であり、1年後には教育実習に参加して3週間(中学・高校免許)、あるいは4週間(小学校免許)現場で教壇に立つことになる。教育実習期間中に多様な子どもたちに接する機会が増えていることは2012年の文部科学省の調査でも明らかで、通常の学級にも知的発達に遅れはないが、発達障害があり学習面又は行動面で著しい困難があ

り特別な支援が必要な児童は6.5%の割合で存在する（文科省，2012）。

一般的に教員を目指す学生は、大学の教員養成課程で教育心理学や発達心理学について学ぶ機会はあるが、多くの場合、授業では概論を学ぶだけで、学生が教員になった場合に対処できるような状態ではないという指摘がある（菊池，2011；定金，2015）。そこで今回、ゼミの初回の授業で多様な子どもに教える難しさを、絵本を通して理解し、自分の問題として捉えてもらう試みを行った。

2つ目の目的は英語絵本に慣れ親しみ、将来教員になる学生が小学校の外国語活動や中学・高校の英語授業で絵本を活用する切掛けを作ることであった。英語絵本が効果的な教材のひとつであると知識としては分かっているが、実際に自分自身で絵本に触れる機会がないとなかなか教材として使えないものである。そこで英語絵本を使った活動を通して絵本が子どもたちに英語を教えるのに優れた教材になることを体感してもらいたいと考えた。さらに、特別の教科として今後益々重要になる道徳教育と関連づけることも可能であると気づくことも期待された。

最後の目的は、卒業研究の問いを考えたり絞ったりする切掛けとなることであった。週1回のゼミの目的は、先行研究などを読むことによって、学生がそれぞれの卒業研究のテーマを絞り込み、研究の問いを立てることである。しかし残念ながら教育現場の経験がない学生は研究テーマを絞り込み、問いを立てることが難しく、その結果、大き過ぎる研究テーマを「問い」としたり、問いを立てることがまったくできなかつたりということがしばしば起こる。そこで筆者のゼミでは、外国語教育という大きなテーマから絞り込み、モチベーションや多様な子どもたちへの言語教育をテーマにし、問いを立てる指導をしている。今回の授業では、「多様な子どもへの教育」という問題に絵本を通して触れることにより、テーマが絞り込めていない学生が卒業研究を進めるヒントをそこ

から得られることを期待した。

5.2 “Michael”を読む

5.2.1 ストーリー

2015年9月の第一回目の授業で“Michael” (Bradman & Ross, 1990)を教材に使用した。Michael少年は先生の頭痛の種である。授業中に紙飛行機をたくさん飛ばしたり、ロケットの絵を描いたりと授業とは関係ないことにいつも夢中になっている。先生たちがどんなに注意しても彼の頭の中にあるのは宇宙船を作って宇宙に飛び立つこと。やがてMichaelは自分で作った宇宙船で校庭から飛び立ってしまう。

5.2.2 手順

絵本“Michael”を紹介する前に、「絵本」と聞いた時にどんな印象を持つかを質問紙を用いて尋ねた。次にオーバーヘッドカメラを使用してスクリーン上に各ページの絵だけを映し出し、どんな物語なのかを想像させて、感じたことなどを用紙にメモするように指示をした。一般的に人は絵本を読むことで、文字だけではなく、絵が発している情報を読み取り、そこから意味を推測したり分析したりする能力を身につけることができる (三森, 2002)。しかし残念ながら文字が読める大人は、絵本が教材となると絵の情報よりも文字情報に頼りがちである。その為、学生にはまず絵だけを見せて分析するように促した。

次に各ページの文章だけを順不同で並べたプリントを配布し (筆者がワープロで文字を打って作成)、ストーリーの展開を思い出しながら文の並べ替えをさせた。この活動は英文の読解力をつける目的で行った。学生にとって馴染みがないと想定された単語 (scruffy, cheekyなど)には意味を付記し、辞書を引かなくても内容理解を可能にした。文を並べ替えた後は隣の学生とペアになりストーリーの展開を確認した。次にスクリーンで絵本を映しながら筆者が絵本を読み聞かせ、学生は答えを確

認した。ストーリーが理解できた後は音読の練習を全体で行い、最後に指名された数名がクラスの前で読み聞かせを行った。

以上が絵本の内容理解、音読、読み聞かせの活動である。その後、学生は質問紙の3つの問い、1) 絵本の主人公の授業態度や行動についてどう思うか、2) 絵本の中の教員の言葉や態度についてどう思うか、3) 教員を目指す立場として絵本からどんなことが学べたか、に答えて提出した。

5.2.3 結果

“Michael”を読む前に、一般的な絵本に対する印象を尋ねた結果、多くの学生が絵本は短く、簡単で子ども向けの本だと思っていることが分かった(表1)。

絵本に対する一般的印象	回答数
簡単・短い	11
子ども向け	10
絵や色彩が豊か	9
楽しい・面白い	6
繰り返し読みたくなる	1

表1. 学生が抱く絵本に対する一般的印象

次に授業の最後で尋ねた3つの設問への回答をまとめる。最初の設問では絵本の主人公の授業態度や行動についてどう思うかを尋ねた。15名の回答者の中で、8名はMichaelの授業態度や行動は良くないと断定した。例えばKさんは「学校は集団行動なので、1名だけ好きなことをしたり、自分の好きなことだけをしてはいけなと思いました」と回答した。8名の中の1名は、「世間一般的に見ると、非常識で問題があると

思う。教師たちの言葉に耳を傾け、自分の考えを話すべきだと思う。自分のことを分かってもらおう努力が足りないと思う」とMichaelへの助言ととれる提案を書き加えたり、別の1名は「学校で学ぶには望ましい授業態度、行動ではなかったと思う。しかし、現場では主人公ほどはいかないにしろ、そのような態度や行動をとる児童・生徒がいるかもしれないと感じた」と絵本の内容と自分自身が教員になった時のことを関連づけて考えていた。

Michaelの言動を個性的だと肯定的に捉えていた7人の内、4人は他の生徒に迷惑をかけることや授業を真面目に受けないことに関しては否定的であった。例えば「マイケルが団体行動についていけないことは悪いこととは思わないが、授業を妨害するのは他人に迷惑がかかることだからそれはいけないことだと思う」や「問題児であるが目標があることはすばらしいことである。授業態度、行動については教師が何度も注意することが必要となってくると感じた」という意見があった。

残りの3名はマイケルの夢を追う行動を評価すると共に画一的な教育方針に疑問を投げかけていた。例えばYさんは「集団で行動するという点において、一般的にはマイケルの態度・行動は否定的に考えられてしまうと思うが、私は良いと思う。学校の目的は勉強だけでなく、その子の将来につながる教育をしてあげること。マイケルはそのような環境ではないにもかかわらず成功させたことがすごい」と宇宙に飛び立つ夢を諦めずに成功させたマイケルを評価している。

2つ目の設問では絵本の中の教師の言動に対する意見を尋ねた。この問いに対しては15名全員がマイケルを理解しようとせずに切り捨ててしまった教師の言動に批判的な意見であった。中には「言うことを聞かなかったり、自由な行動をとってしまい、指導することはとても大変だとは思いますが」と教師に同情を示す学生もいたが、「児童を自由にさせて

しまっている環境を作っている教師たちがそもそもの原因であると思う。“Give up”など児童を見放すような言動は教師失格であると思う”と強く批判する者もいた。

3つ目の設問では絵本から学べたことを尋ねた。15名中14名の学生は、将来教員になった時に問題を抱えている児童や生徒に出会った場合、コミュニケーションを充分に取って理解するように努力することが大切だと理解できたと記載していた。このようにほぼ全員が生徒の気持ちを理解することが大切だとは書いているが、その目的が「うまく導くとよい子になる」、「(問題児は)どんな行動をとればやる気を出してくれるのか」という考えや疑問が示すように最終的には集団行動が取れるように指導することが大切だと考える学生もいる。これは公の教育の場である学校が抱える難しい点である。つまり、子どもたちの多様性を認識し個性を大切に、それぞれの子どもに合った教育を提供することが望ましいと同時に、全員に対して公平な教育（時には画一的な教育）を提供することが公教育には期待されているからだ。

以上の結果をまとめると、今回の授業で絵本を教材としたことにより、学生は多様な子どもたちの存在を改めて認識し、教員としてどのような接し方をすればいいのかを考えることができたと言える。しかしながら、それは個人の考えに留まり、クラス全体で話し合うことができなかった。似たようなテーマを扱う絵本を複数冊読み、グループやクラス全体で議論する機会を持つことによってより深い学びになると考えられる。

また3つ目の設問に対して小学校教員免許の取得を目指している1名が、「絵だけの想像で内容をつかめるということは児童に対して有効的な教材になると思った」と記載しており、教材としての価値を見出したことが分かった。実際に絵本を使ってみることで、絵本の教材としての可能性に気がついた好例だといえる。

15名のゼミ生の中ですでに英語絵本をテーマに卒業研究を考えている者が3名、発達障害を持つ子どもへの英語教育をテーマに考えている者が1名いる。今回の絵本を使った授業内容が、研究テーマを絞り、研究の問いを考えていく助けになるかどうかは、今後論文指導を進めていくなかで明らかにしたい。

本稿は3年生を対象とした春学期最初の授業報告であり、質問紙への回答は1冊の絵本に関するものであった。従って、春・秋学期を通して複数の絵本を使用し、間隔をおいて複数回データを収集すれば、より多様な意見が得られ、その間の学生の成長も見られる可能性がある。また今回の実践では教育実習を経験する前の3年生を対象にして行ったが、教育実習を経験することでより具体的に絵本の内容と自分の経験を関連づけることができると考えられる。以上のことを考慮し、次回は3年生の4月から卒業するまでの約2年間を実践期間としたい。さらに、質問紙に加えインタビューによるデータを収集し、質的研究としてのナラティブ分析を行うことで単なる授業報告ではなく実践研究に発展できると考えている。

6. おわりに

本稿では英語絵本の大学教材としての可能性をさぐるために“Michael”を使用した授業の試みを紹介した。学生の回答から、多様な子どもたちに接する難しさや教師として大切なことなどを学生たちが考える切っ掛けとなったと言える。

学生が教育現場をテーマにした絵本を読むことによって自分自身の将来の教師像をどのように作りあげていくかは興味深いトピックである。動機づけ理論のひとつである「可能自己」(Markus & Nurius, 1986)の理論では、人は出来るだけ鮮明に理想とする将来の自己像を描けると同

時に避けたい将来像も描くことが出来ると目標に向かう動機が強化されると言われている。今回は教育がテーマの絵本を多数読むことによって教師としての「可能自己」が長期的にはどのように変化するかを調査研究したい。

また、今後の実践としては3年生のゼミ以外にも例えば演習などの授業で絵本を使用し、英語の力をつけると同時にジェンダー問題、家族問題、環境問題などについて考える授業を展開していきたいと思う。

引用文献

- Ammon, D. B. & Sherman, W. G. (1996). *Worth a thousand words: An annotated guide to picture books for older readers*. Englewood: Libraries unlimited, Inc.
- Bradman, T. & Ross, T. (1990). *Michael*, London: Andersen Press
- Briton, D., Snow, M.A., & Wesche, M.B. (1989). *Content-based second language instruction*. New York: Newbury House.
- Fujikoka, C. (2004). Fostering emotional intelligence in EFL students: Nurturing empathy through children's literature. *The Journal of the College of Foreign Languages, Himeji Dokkyo University*, 17, 67-83.
- Goleman, D. (1995). *Emotional intelligence*. New York: Bantam.
- Hayashi, C. (2012). Children's literature for adult L2 learners. *Kunitachi College of Music Journal*, 47, 107-115.
- Hayashi, C. (2015). Fostering less proficient students' intrinsic motivation for L2 reading (English). *Kunitachi College of Music Journal*, 49, 47-55.
- Ho, L. (2000). Children's literature in adult education, *Children's*

Literature in Education, 31, 259-271.

Lipson, R. E. (2000). *The New York Times Parent's guide to the best books for children*. New York: Three Rivers Press

Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, 41(9), 954-969.

Polacco, P. (1998). *Thank you, Mr. Falker*. New York: Philomel.

Zambo, D. (2005). Using the picture book *Thank You, Mr. Falker* to understand struggling readers. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 48, 502-512.

Zambo & Hansen (2005). Once upon a theory: Using picture books to help students understand educational psychology, *Teaching Educational Psychology*, 1, 1-8.

岡田達信 (2011) 『大人のための絵本セラピー：絵本はこころの処方箋』
端雲舎

落合恵子 (2006) 『絵本屋の日曜日』 岩波書店

菊池哲平 (2011) 「教育学部学生における発達障害のイメージ：接触経験・知識との関連」『熊大教育実践研究』 28, 57-63.

定金浩一 (2015) 「生徒理解のための発達障害入門：アスペルガー症候群について」『大阪産業大学論集：人文・社会科学編』 24, 191-201.

鄭恵元・鈴木宏幸・村山陽・長沼亨・野中久美子・大場宏美・倉岡正高・藤原佳典 (2012) 「健康増進講座受講から世代間交代型ボランティア活動への移行を規定する要因」『日本世代間交流学会誌』 2, 25-32.

三森ゆりか (2002) 『絵本で育てる情報分析力』 一声社

藤岡千伊奈 (2007) 「大学生を対象とした絵本の読み聴かせを導入した

リーディング授業」『JACET全国大会要綱』46, 128-129.

文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課（2012）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」1-19.